

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

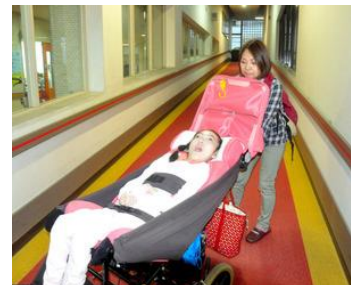
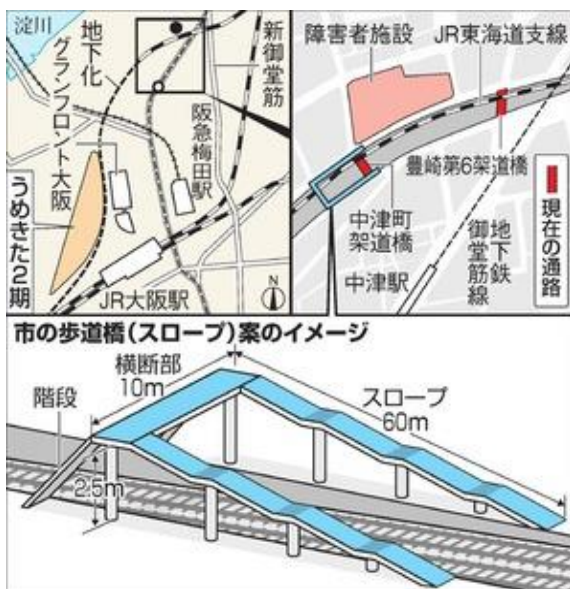
知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3337号 2016.11.7 発行

「大阪最後の一等地」、再開発に障害者ら困惑 うめきた 山中由睦

朝日新聞 2016年11月6日

大阪市の歩道橋（スロープ）案のイメージと地図



「大阪最後の一等地」と呼ばれるJR大阪駅北側の「うめきた2期区域」再開発の陰で、自力で歩くのが困難な人たちが途方に暮れている。障害者施設の利用者らが使ってきたJRの線路下の通路が、再

開発に伴う線路の地下化でなくなる。市は代わりにスロープ式の歩道橋を設ける計画だが、遠回りすることになるため、施設利用者らは市に再考を



求めている。

JR大阪駅の約1キロ北にある障害者の医療施設「大阪整肢（せいし）学院」（大阪市北区）は、子どもたちを中心に約90人が暮らし、約40人が治療やリハビリで通院する。

整肢学院の利用者は重い身体障害や知的障害があり、自力で歩けない人が多い。近くに住む小川雅永（まさえ）さん（28）もその一人。出生時に酸欠状態になり、脳に障害が残った。話すことも立つこともできず、首が不安定でいすに座れないため、寝た姿勢で乗るタイプの車いすを利用する。介護ヘルパーに押しもらい、週に1回通院している。

特殊な車いすは16キロと重いうえ、寝た状態で移動するため、わずかな衝撃で首や頭をいためる恐れがある。介護ヘルパーは慎重に動かさねばならず、学院内の52メートルのスロープを上るのに2～3分かかることもあるという。施設には同じような車いすで移動する利用者も少なくない。

母親の尚美さん（59）が心配しているのが、整肢学院の目の前にあるJR東海道支線の「中津町架道橋」（長さ23メートル、一部撤去）下の通路（桁下高さ1・4メートル）がなくなることだ。通路は整肢学院と市営地下鉄中津駅をつなぎ、学院の利用者の生活に欠かせない。利用者は通院だけでなく、社会復帰の訓練で中津駅から地下鉄で梅田に買い物に行く時などに使う。

うめきた2期の再開発で、市やJR西日本は関空特急「はるか」などが走る東海道支線を地下化し、大阪駅近くの地下に新駅をつくる計画を進めている。中津町架道橋下の通路は、線路が地上から地下へ下る区間にあたっており、線路の下を通れなくなる。

市は線路を渡れるスロープ式の代替歩道橋をつくる方針で複数案を示している。しかしスロープで線路の上を迂回（うかい）して、高さ2・5～3・5メートルの歩道橋を渡ろうとすると、長さが130～170メートルになり、今の5倍以上に延びる。

学院の隣には子どもたちが学ぶ府立中津支援学校があり、高齢者が多く住む市営住宅も近くにある。尚美さんは「これまでの何倍もの距離を歩かないといけない。障害がある子どもたちや高齢者も利用するので、せめてエレベーターは設置してほしい」と訴える。

障害者スポーツの魅力をアートで紹介 千代田、港区で企画展

東京新聞 2016年11月7日

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックに向け、障害者スポーツの魅力をアート作品で伝える都の企画展が七日、東京区政会館（千代田区飯田橋三）と島嶼（とうしょ）会館（港区海岸一）で始まる。入場無料で二十九日まで。

区政会館では、首都大学東京大学院システムデザイン研究科の藤原敬介教授の研究室による作品を展示。目の錯覚を利用し、陸上競技用車いすの影絵が動いているように見せる大型作品や、車いすバスケットボールなど座って行う競技を体感できるオブジェが並ぶ。

島嶼会館では、車いすテニスやブラインドサッカーなどを題材に、浦沢直樹さんや高橋陽一さんら人気漫画家五人が描いたイラストパネルなどを展示する。

婦中で藤井選手ら ボッチャ競技体験

中日新聞 2016年11月7日



藤井友里子選手（右から2人目）が見守る中、ボッチャを体験する親子ら＝富山市婦中町の「ファボーレ」で共生フォーラム

障害者に対する理解を深める「とやまふれあい共生フォーラム」が六日、富山市婦中町の商業施設ファボーレで開かれた。リオデジャネイロ・パラリンピックのボッチャ競技で、藤井友里子選手（魚津市出身）が銀メダルを獲得したことを記念し、ボッチャの体験コーナーが設けられた。

体験コーナーは、障害者の就労支援施設の出店コーナーとともに、施設中央にある広場に登場。藤井選手が同席し、障害がある子どもたちや買い物客ら参加者にアドバイスをしていた。

藤井選手と同じ脳性まひがある小学四年生の間山明音（あかね）さんは、母親の千尋さんと初体験。ボールをうまく操り、ジャンプをして喜んでた。千尋さんは「授業では触れられない競技。すごく楽しかったみたいで良かった」と目を細めていた。

フォーラムは県が開催。藤井選手は「競技を始めるまでは、自分も家にこもっていた。楽しいことを見つける手助けをするのも自分の役割だと思う」と話した。また、競技普及に向けて「メダル獲得後は練習の場所が広がり、今回もオープンな場所で体験を提供できて、うれしい」と喜んだ。（木許はるみ）

運動に汗、障害者交流 県内 25 施設、紫波で親交深める 岩手日報 2016 年 11 月 6 日



ゴールに狙いを定めてディスクを放つ出場選手

県知的障害者福祉協会（鷹嘴武寿会長）など主催の第 20 回スポーツ交流会は 5 日、紫波町桜町の町総合体育館で開かれ、約 290 人がフライングディスクなどの 3 競技を通じて親交を深めた。

障害者支援施設などの県内 25 施設から利用者らが参加。フライングディスクのほか卓球、輪投げで団体戦や個人戦を実施し、選手たちは真剣な表情で試合に臨んだ。

競技の合間には音楽イベントも開催し、参加者は音楽に合わせて楽しく体を動かした。

「人を大切にする経営」 愛読者感謝祭で中村・毎日新聞論説委員 / 福島

毎日新聞 2016 年 11 月 6 日

毎日新聞の「第 21 回愛読者感謝祭」（毎日新聞社主催、三宅新聞店共催、福島民報社、スポーツニッポン新聞社、株式会社ケンオリ後援）が 5 日、福島市の音楽堂であった。毎日新聞の中村秀明論説委員（58）が「人を大切にする経営」をテーマに講演し、福島市の運動着メーカー「クラロン」の田中須美子会長（91）と対談。約 200 人の来場者が聴き入った。

中村論説委員は企業経営などを取材し、毎日新聞 3 面のコラム「水説」を執筆している。

障害者差別を解消し、気持ちよい社会に 松本で討論会 中日新聞 2016 年 11 月 7 日

障害がある人の抱える諸問題を市民で共有するためのフォーラム「みんなが気持ちよく暮らせる社会」が 6 日、松本市双葉の市総合社会福祉センターで開かれた。

松本圏域障害者総合相談支援センター「ボイス」の東條知子所長は、四月施行の障害者差別解消法を解説。「障害者の受ける社会的不利は、その人が持つ機能障害を考えないで作られた社会に原因がある」と法の背景の考え方などを説いた。

討論会では、全盲の松本視覚障害者福祉協会の前野弘美会長が「障害者同士ですら差別はある。自分たちのそばで起きている差別を減らせなければ、社会を変えるのは難しい」と訴えた。

NPO 法人松本市聴覚障害者社会参加支援協会と市内のライオンズクラブなどが共催し、約五十人が参加した。

衆院議員・野田聖子が語る「障害児の息子がくれたもの」

by 深澤友紀



dot. 2016 年 11 月 5 日
障害児の母として社会の嫌悪を感じてきたという衆院議員の野田聖子さん。障害者施設で起きた殺人事件に「いつか起きると思っていた」（撮影／写真部・長谷川唯）

真輝くんといると母親の表情に戻る野田さん。真輝くんは胃ろうや気管切開などの医療的ケアが必要だが、



元気に走り回ることもできる（写真：野田聖子さん提供）

障害をかかえる息子、真輝くんを育てる野田聖子さん。日々子育てをしながら、また相模原事件を受け、何を思ったか。母親として国会議員として、いまの社会に伝えたいことを聞いた。

——今年 7 月、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で元職員、植松聖容疑者（26）が入所者 19 人を殺害する事件がありました。容疑者は逮捕後の取り調べでも一貫して「障害者は不要な存在」と主張し、ネットではその主張に共感する書き込みも見られます。

私はこの事件に驚きませんでした。こういう事件がいつか起きるんじゃないかという思いがずっとありましたから。

息子の真輝（5）は、へその緒の中に肝臓が飛び出す「臍帯ヘルニア」と、本来 2 本ある心臓につながる血管が 1 本しかない「心臓疾患」の障害を持っていることが、生まれる前にわかっていました。生まれた後も、食道と胃が分離する「食道閉鎖症」が見つかり、それが原因で気管軟化症となり呼吸が止まったため、気管切開して人工呼吸器もつけました。これまで手術を 11 回も受けています。

真輝が生まれてから、障害者を嫌悪する社会の空気をずいぶん吸い込んできたので、今回の事件は、単に用意されていた導火線に火が付いただけなんだと感じたんです。

——どなたときに「嫌悪」を感じてきたのでしょうか。

最初に感じたのは息子に対して「かわいそう」って言われたときです。自然に出てくる言葉で悪意はないんだけど、かわいそうという言葉は上から目線だし、言われた瞬間、排除される感じがした。そこには障害者に対する不要感が漂っている。悪気がないだけ、社会のスタンダードなんだと感じました。

●医療費に「金食い虫」

——「障害者＝不幸」と思っている人は多い。

うちの子はいろいろ不具合があるけど、私の家で十二分の看護体制のもと生活して、保育園だって看護師をつけて通っている。父親は仕事をなげうってまで看護してくれて両親に愛されている。「かわいそう」って言われたらギャップを感じます。私は真輝を障害児と思って育てていない。私にとっては最初で最後の子なので誰かと比べようもないし、「野田真輝」として育てているだけなんです。

——ネットでもいろいろと書かれています。

たくさんチューブにつながれて生きる息子は「ばけもの」扱いされました。私は半分母で半分国会議員なんで、国会議員としてはなんともないんだけど、母親としては、見ず知らずの人の言葉の暴力が息子に向けられて、とても恐怖を感じました。「殺すのもやぶさかじゃない」という人たちだから、私が生きている間は息子を守れるけど、死んだあとはどうなるのだろうか。ほかには、医療費がかかって「金食い虫」と言われたり、「医療費がかかる息子を見殺しにしろ」と言われたりね。

——作家の曾野綾子さんの著書『人間にとって成熟とは何か』では、野田さんについて、「自分の息子が、こんな高額医療を、国民の負担において受けさせてもらっていることに対する、一抹の申し訳なさ、か、感謝が全くない」と書かれていますね。

社会には「障害者は役立たずで国に負荷をかけている」と考える人がいますが、息子が今後どう社会に貢献するかわからないじゃないですか。少なくとも、今年改正された障害者総合支援法に「医療的ケア児」の言葉が入ったのは、息子の存在が大きかった。

●息子のおかげでプラス

——植松容疑者も「障害者は生きていてもしょうがない」と話していました。

周囲の人がその人がいることで潜在能力が引き出されて、世のために力を発揮する例も多い。例えば、ナミねえのニックネームで知られる竹中ナミさんは、重度の心身障害がある娘がいたから起業して、誰もが生き生きと働ける社会実現のために活動を始めて、政府の会議の委員もされている。彼女は障害を持った子の親となったことで、社会へとても貢

献していますよ。

私も息子のおかげでプラスになった。息子が生まれてきてくれたことで、自分に一番欠けていた政治家の資質を手に入れることができた。これまで弱者のための政治というのを頭でわかっているけど、理解できていなかった。それが、この子によってストンとわかるようになった。差別は、こういう嫌な思いをするんだとかね。当事者感覚で受け止められるようになった。

ただ、一般的には、「障害児を産んだ母親は、家で 24 時間世話をしなきゃいけない」的な圧力があって、働くこともできずに貧困になっちゃう人が多い。そこは改善していきたい。

●休息も許されない親

——今回の事件では被害者の名前も公表されませんでした。

一部の遺族のお気持ちもわかるけど、私はやっぱり名前を出してほしかった。被害者が生きてきた何十年という人生がないことになってしまう。東日本大震災の犠牲者は未来永劫記憶に残るけど、今回の被害者は残らない。思い出すことで事件を検証できることもあるのに。

——出生前診断が広がり、染色体異常がわかれば中絶を選ぶ人が増えています。

私は、その判断については是も非もないと思う。障害のある子を育てていけるかどうかという環境にかかっているから。この国の空気はまだ冷たい。私がおなかの子に障害があるってわかって産むことを決めたのは、育てていける環境にあったから。でも環境がない人もいる。

しかも、産んだらペナルティーとして「まずは親が育てろ」みたいな社会の圧力がある。在宅医療の介護者はレスパイト（休息を取ることも）も許されない。24 時間働けますかの世界。異常ですよ。

私たちが真輝が 2 歳 3 カ月で退院したとき、胃ろうで数時間おきに食事を取っていたし、気管切開しているのでこまめなたんの吸引が必要でした。夜じゅう「あ、ご飯だ」「あ、アラームが鳴ってる」という状態。一睡もできない日もあるし、3 時間寝られたら御の字という生活でした。当時は自民党の総務会長で仕事も忙しかったから、本当に大変で。（指さして）この足の傷は当時、目が回って官邸の階段から落ちたときのものです。

——今も生活は落ち着きませんか。

今は、真輝が午後 6 時半に保育園から帰宅して、だいたい午後 7～8 時に訪問看護があって、メディカルチェックとお風呂。その 1 時間にだいたい夫が急いでご飯をつくって食べます。私も会合があっても 2 次会には行かず、午後 9 時すぎには帰ります。月曜日と水曜日は休肝日と決め、保育園のお迎えも私が担当。その日は夫に息抜きしてもらっています。

●母子同伴求める学校

——野田さんのブログに登場する真輝くんは、とつてもわんぱくで、「医療的ケア児」のイメージを覆します。

医療的ケア児というと、イメージがわかりません。今回の改正障害者総合支援法案の国会審議のときには、真輝の写真が資料にほしいと頼まれました。人工呼吸器や胃ろうをしていても、他の子と同じように歩いたり走ったりできる子もいる。

医療が発達してこれまで助からなかった赤ちゃんも助かるようになり、医療的ケア児は増えていたんだけど、肝心の社会基盤を支える法律の中で存在が認められていなかった。だから問題が次々起きた。

一番大変なのは教育。医師法のもと、家族以外は医師、看護師しか医療的ケアができない。でも、学校には医師、看護師は常時配置されていないので、例えば、時折たんの吸引と胃ろうをしてあげればちゃんと小学校に通える子が通えず、義務教育が受けられないという憲法違反にも近いことが起きている。うちの息子も来年小学生になるんだけど、特別支援学校ですら看護師がいなくて、通学するには「母子同伴で」と。でもそんな学校じゃないし、毎日学校行ったら、母親の私は国会議員の仕事ができなくなっちゃう。

養護教諭がある一定の研修を受ければ医療的ケアをできるようにしたらいい。食物アレルギーの子どものために、緊急時には教師や保育士もエピペンを打てるようになった。変えようと思ったらできるんです。

●見えがあるから伸びる

——保育園でも入園を断られるケースがほとんどです。

今年、「保育園落ちた日本死ね!!!」のブログが話題になりましたが、そもそも落ちる保育園もないんだよというのが我々。

私は、自分の給料から看護師を雇って、真輝を保育園に通わせています。看護師がいれば真輝のような子でも保育園に通えた、というエビデンスを出して、制度が変われば、次の人たちは実費負担をせずとも保育園に通えるようになる。そのために捨て石になろうと思っています。

なにより、子どもは保育園に通って成長する。うちの子もトイレトレーニングは保育園のおかげで進んだ。やっぱり親には甘えちゃうから、家にいるときはオムツがいいって言う。でも保育園では1回ももらさずにおしっこもうんちもできるようになった。子どもだって見えがある。だから伸びる。

いま私が掲げようと思っている政策が、保育園・幼稚園の義務化。そうすれば、障害のある子どもも当然入る権利が出てくる。健常の子たちも小さいうちから多様性を知ることができます。

●健常者なんて幻

——社会は障害者とどう接していいのかもわかっていません。

まずは慣れてほしいと思うんですよね。やっぱり無知・無関心がやっかいな壁。日本ではもっともっとコマーシャルにも障害者を使ってもらいたい。アメリカでは、当たり前のようにオムツのコマーシャルにダウン症の子が出演していたりする。

大手広告会社の社長と会ったときに「どんどん出してください」と伝えたら、視聴者から「障害者をさらすな」という意見が来ると言っていました。

でもどんどんさらしてほしい。変な話、ちょっと前まで（お笑いのトレンドイエングルの）斎藤さんのように薄毛の人もテレビに出てこないタイプだった。でもさらされているうちに私たちも気にならなくなった。障害者もさらしていくしかない。

ただ、ブログやメディアで息子の話や写真を載せることについて、夫婦で意見が分かれています。夫は一般人なので、二つ心配していて。息子が物心ついたとき傷つくかもしれない、もうひとつは顔が知られて社会でターゲットにされたらどうするのかと。私も不安はありますが、真輝のおかげで声を上げられなかった医療的ケア児がアクティブになって、息子の存在が社会の役に立っている。彼のプライドを保てると言って強引に夫を説き伏せています。

——この社会は障害者と健常者に溝があります。

昔は社会の要は男で、頑丈な人が国を代表し、それ以外は女性も年寄りも障害者もアウトでしたから、その名残じゃないかと思います。

女性でも恋も女も捨てて「男」として働く人たちは社会の一角として生きられて、障害者もホーキング博士のような非常に優秀な人は食い込むことができたけど、普通の女性や障害者は社会で活躍できない。でも、社会は少しずつ変えることができる。今年4月に障害者差別解消法が施行されました。

——政治家・野田聖子としてやりたいことはなんですか。

私は世の中の価値をすべての人が共有し実感できるようにしたい。人材ミスマッチで、能力があるのに障害があり就職できないから単純作業をしています、というのはもったいない。多様な人々の働き方のメニューをつくり、働き方改革ができればいい。

そして「健常」という言葉をなくしたい。健常者の定義なんてないでしょ。健常と障害の境目なんてどこにあるのか誰にもわからないし、健常者って正直、幻だと思います。年を取れば誰もが障害者になる可能性があるんですから。（編集部・深澤友紀）

「ベーシックインカム」は福祉の切り札になるか 2017年から、フィンランドやオランダで実験段階へ
日経ビジネス 2016年11月7日



エンリケダンス

スペインIEビジネススクール教授

IEビジネススクールでMBA取得。米UCLA情報システム学部で学び博士号取得後、ハーバードビジネススクールで学ぶ。労働者や企業、社会に対しての技術革新の影響についての研究を深めている。

欧州の一部の国でベーシックインカム制度実施へ

ベーシックインカム（基礎所得保障）制度の実現に拍車がかかってきた。ベーシックインカムとは失業手当や身体障害者への経済的援助、生活保護などといった、一定基準を満たした者が受け取れる現行の「条件つき給付金」の進化した形として提唱されているシステムだ。所得や能力、資産に関わらず無条件で、最低限の生活を送る



ために必要なカネを、すべての人に定期支給する。

2016年5月、スイス・ジュネーブ市内のプランパレ広場で、ベーシック・インカム（基礎所得保障）制度の導入を目指す活動家らが巨大なポスターを作り宣伝活動を行った。しかし翌6月、スイスでベーシック・インカム導入を巡り国民投票が実施されたものの否決された。（写真：ロイター／アフロ）

ベーシックインカムは、社会福祉の切り札とも、カネのバラマキとも言われ賛否が分かれてきたが、欧州では実際に2017年からベーシックインカムの社会実験が相次いで始

まる。今、最も注目を浴びているプロジェクトは、フィンランド政府によるベーシックインカム制の施行である。来年から、無作為に選ばれた2000人から3000人のフィンランド国民（成人）が月額560ユーロ（約6万4000円）を支給されることになる。支給における条件は皆無だが、この手当は失業手当等の現行の公的手当に取って代わるものとなる。

560ユーロとは国民年金の最低支給月額と同一だ。この試験的实施は2017年と2018年に行われるが、実際に実施することにより「ベーシックインカム制度が、はたして貧困層の減少につながるのか」「煩雑な事務手続きをなくすことができるのか」「社会的に疎外された人々を救済できるのか」「それと同時に雇用が増えるのか」——を検証する。

社会福祉手当の支給システムを単純化する狙い

フィンランド政府の意図はまず、社会福祉等の手当の支給システムを単純化することにある。「援助金受給資格があるかどうか」「申請に不正がないか」といったことについて、絶えず監視している現行のシステムから、無条件に一定額を毎月支給し、貧困レベルからの救済を保証するシステムに変更するのが目的。

フィンランドの施策よりも小規模ではあるが、オランダでもユトレヒト市で同様の試みが2017年1月から実施されるし、カナダのオンタリオ市やケニアでも準備段階に入っている。また米国カリフォルニア州のオークランドでは、起業家の養成機関として有名な企業、Yコンビネーターの主導によりベーシックインカムの導入が検討されている。

無条件にベーシックインカムを支給して雇用を増やせるのか？ まず誰もが思い浮かべる疑問は、無条件にお金をもらってしまったら仕事への意欲が失せるのではないかということだ。怠け者にカネを払うことにならないか？ しかしこの固定観念が実は誤りであることを証明する例は多い。

失業手当の受給者が“闇”で働くことを抑止する

現行では種々の公的手当を受け取るためには、一定額の収入を越えてはならない。もし、

収入が増えれば手当はストップする。失業手当に関して言えば、仕事を見つけて失業状態から脱すれば失業手当の支給がなくなるため、それを避けて、隠れて“闇”で働くことになりがちだ。そうすると、その人の労働から国家に入るはずの税収がなくなってしまう可能性が高い。

シンプルな例を一つ挙げることにする。スペイン・マドリードで、年間4500ユーロ（約51万5000円）の生活保護を受けているある市民が年収7200ユーロ（約82万3000円）の仕事を手に入れたと仮定しよう。失業手当と比較すると月額2700ユーロ（30万8000円）の増収となる。だが、もちろん就業するので実業手当受給はストップとなる。その上、税金を引いた後の実収入は額面の62.5%となってしまう。

いつ貧困層に落ち込むかもしれぬ労働者に、こんな所得税率を適用する意味があるのだろうか。こんな状況では、失業手当を受け取っている間は税金から逃れられる“ブラック”な仕事をするか、確定申告をしないという選択をするというのも理解できる。

失業手当を受け取りながらも闇で働くことをとどまらせるための何かいい方法は、あるだろうか？

無条件に定期的に手当を支給してこの人が貧困層に陥らない、という生活のベースをまず作り、その上で労働で得た額面からきちんと税金を収めてもらうという生活に移行してもらう方が、受給者にとっても社会にとっても意味があるのではないだろうか。

人工知能や機械化が、仕事を奪っていく近未来

今後、さらなる機械化や人工知能などのソフトウェアによって生産性が向上し、仕事自体が減って行くと考えられている。それがために職を失った人の多くは、貧困層に落ちる可能性がある。そしてその時、社会福祉手当の支給の条件は収入が全く無いことが証明できること——。そんな状況が普通になる可能性をふまえて、我々はこれから持続可能な未来をどうデザインしていけばよいのだろうか。

これまで見てきたように、失業手当は「支給条件」を設けることで新しい仕事を探す意欲を削いでしまっている可能性がある。失業手当を受給している人が働き始めると手当の支給が止められたり削られたりするため、働く意欲をそいでしまう。これにより、むしろ貧困からの脱却が難しくなる「貧困の罠」の問題を内包していると言われる。

似たようなケースを挙げれば、スペインの場合、年金を受け取っているライター（作家）にある一定額以上の著作権収入が入った場合、年金支給はストップする可能性がある。しかし、保険料を長年支払ってきた年金の支給を国家が停止してよいのだろうか？ このカネは厳密に言って国民のものだ。

社会保障の受給に「条件」を設けると経済活動が停滞する

このように生活保障受給に「条件」を設けると経済活動が停滞する。前に述べたライターの例では、まだ書けるのに書かなくなってしまうという事態が起こるかもしれない。受給者の経済活動に関係なく無条件で年金を支給すべきではないのだろうか。

ベーシック・インカムの提唱者は、思想的に「左」でも「右」でもない。ただ未来を見ているだけだ。人工知能などといった新しいテクノロジーが雇用を奪っていく近い将来を見据えて、ブルーカラーや単純労働だけではなく、全ての労働者にとってこの新しいシステムは解決策となり得るかもしれないと、私は考えている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

